

【 復活のトロパリ 第2調 】

しせざるいのちよ、なんぢしにくだりし
死 生 命 爾 死 降

と お き、かみのせいひかりにてぢご
時 お き、か 神 性 光 地 獄

くをころせえり。しせしものをちかよ
殺 死 者 地 下

りふくかつせしめしと お き、てんぐんみな
復 活 時 天 軍 皆

よびてい え え り、いのちをたもうしゅ
呼 日 え り、生 命 賜 主

ハリストスわが か みよ、こうえいはなんぢに
吾 神 光 榮 爾 んぢに

き い す。
歸

【 日本の亜使徒ニコライのトロパリ 第4調 】

しととひとしくどうざなるもの、ちゅう
使 徒 等 同 座 者 忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
實 神 智 役 者 聖

なるしんにえらばれたるふえ、ハリストスのあい
神 撰 笛 愛

にみちた るうつわ、わがくにのこう
満 器 我 國 光

しよ お しゃ、あしとしゆきょうせいニコライ
 照 お 者、亜使徒主教聖
 よ、なんぢのぼくぐんのため、および
 爾 羊 群 爲 あ め、 お よ び
 ぜんせかいのため、いのちをたもうせい
 全 世 界 爲 生 命 賜 聖
 さんしゃにいのりたまえ。
 三 者 祈 給 え。

【 日本の亜使徒ニコライのコンダク 第4調 】

こうえいはちちとことおとせいしんにき
 光 榮 父 子 お と 聖 神 歸
 す、
 せいせいしゃあしとせいニコライよ、わが
 成 聖 者 亜 使 徒 聖 我
 くになんぢをたびびとおよびいほうじんとうけ
 國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受
 しに、なんぢははじめわがくににおいておの
 爾 初 我 國 於 己
 れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストスの
 外 來 者 知 れ ども、ハ リ ス ト ス の
 ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて
 光 暖 流 爾 敵

きをぞくしんのことなあし、かれらにか
 屬神子爲彼等神
 みのおんちようをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて
 恩寵與教會建
 たり、いまこのきょうかいのためにいのり
 今此教會爲祈
 たまあえ、けだしわれらそのしよしはなん
 給あえ蓋我等其諸子爾
 ちによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
 呼我善牧者慶
 べよ。

【 復活のコンダク 第2調 】

いまもいつもよよに、アミン。
 今何時世世
 ぜんのおのきゆうせいしゅよ、なんぢはかよりふ復
 全能救世主爾墓
 くかつせしに、ぢごくはきせきをみて
 活地獄奇蹟見
 おののき、ししやおき、ぞうぶ
 慄死者起おき造物
 つはみてなんぢとともによろこび、アダムは
 見爾偕喜

ともにたのしいみ、わがきゆうせいしゅ
 共 樂 我 救 世 主
 よ、せかいはつねになんぢをほめうとお
 世 界 常 爾 讚 歌
 お う。

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行なう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる
 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
 に、

アミン。

【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
 聖 神 聖 勇 毅 聖

じょう せい の もの よ、 われら を あわれ め
 常 生 の 者 我 等 憐

よ 。 せい なる か み、 せい なる ゆ う き、 せい
 聖 神 聖 勇 毅 聖

なる じょう せい の もの よ、 われら を あわれ
 常 生 の 者 我 等 憐

め よ 。 せい なる か み、 せい なる ゆ う き、
 聖 神 聖 勇 毅

せい なる じょう せい の もの よ、 われら を あわ
 聖 常 生 の 者 我 等 憐

れ め よ 。 こう え い は ち ち と こ と せい しん
 光 榮 父 子 聖 神

に き す、 い ま も い つ も よ よ に、 ア ミ ン。
 歸 今 何 時 世 世

せい なる じょう せい の もの よ、 われら を あわ
 聖 常 生 の 者 我 等 憐

れ め よ 。 せい なる か み、 せい なる ゆ う
 聖 神 聖 勇

き、 せい なる じょう せい の もの よ、 われら を
 毅 聖 常 生 の 者 我 等

あわれ め よ 。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

こうえい ほうざ あ つね あが ほ いま いつ よよ
の光 榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、)

【 プロキメン 主日第2調 】

司祭) 慎みて聴くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主は、我が力、我が歌なり、彼は我が救となれり、

しゅ は わ が ち か ら 、 わ が う た な り 、 か れ は わ
主 我 力 我 歌 彼 我
が す く い と な れ り 。
救

誦經) 主は厳しく我を罰したれども、我を死に付さざりき、

しゅ は わ が ち か ら 、 わ が う た な り 、 か れ は わ
主 我 力 我 歌 彼 我
が す く い と な れ り 。
救

誦經) 主は、我が力、我が歌なり、

か れ は わ が す く い と な れ り 。
彼 我 救

【 アポストロス 使徒經 194端 コリント後書 11章31節~12章9節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パウエルがコリント人に達する後書の讀、

司祭) 謹みて聴くべし、

誦經) 兄弟よ、神、我等の主イイススハリストスの父、世世に祝讃せらるる者は、我が謊

らざるを知る。ダマスクに於て、アレタ王の邑宰我を執えんと欲して、ダマスクの邑を守
 れり、我筐を以て牖より牆に循い、縋り下されて、彼の手を脱れたり。誇ることは我が
 爲に益する所なし、蓋我主の顯現と默示とに及ばん。我ハリストスに在る一人を知
 る、此の人は十四年前に、(肉體に在りてか、知らず、肉體の外に在りてか、知らず、神
 之を知る、)第三重の天に擧げられたり。我此の人に於て、其(肉體に在りてか、肉體
 の外に在りてか、知らず、神之を知る、)樂園に上げられて、道い難き言、人の語る能わ
 ざる者を聞きしを知る。我此くの若き人を以て誇らん、己を以て誇らず、或は私の弱
 きを誇らんのみ。我若し誇らんと欲せば、無智なる者と爲らず、蓋眞を言わん、然れど
 も我自ら戒む、恐らくは人、我に見る所、或は我に聞く所に過ぎて、我を擬ら
 ん。默示の至大なるに因りて我が高ぶらざらん爲に、一の棘は我が肉體に與えられたり、
 即サタナの使なり、我を撃たん爲、我が高ぶらざらん爲なり。我三次主に之を我よ
 り離さんことを求めたり。然れども主は我に謂えり、私の恩寵は爾に足れり、蓋我
 の能は弱き中に行わる。故に我寧甘んじて我が弱きを誇らん、ハリストスの能の
 内の内に寓らん爲なり。

(比較用 口語訳) 永遠にほむべき、主イエス・キリストの父なる神は、わたしが偽りを言っていない
 ことを、ご存じである。ダマスコでアレタ王の代官が、わたしを捕えるためにダマスコ人の町を監視し
 たことがあったが、その時わたしは窓から町の城壁づたいに、かごでつり降ろされて、彼の手からのが
 れた。わたしは誇らざるを得ないので、無益ではあろうが、主のまぼろしと啓示とについて語ろう。わ
 たしはキリストにあるひとりの人を知っている。この人は十四年前に第三の天にまで引き上げられた
 —それが、からだのままであったか、わたしは知らない。からだを離れてであったか、それも知らな
 い。神がご存じである。この人が—それが、からだのままであったか、からだを離れてであったか、
 わたしは知らない。神がご存じである—パラダイスに引き上げられ、そして口に言い表わせない、人
 間が語ってはならない言葉を聞いたのを、わたしは知っている。わたしはこういう人について誇ろう。
 しかし、わたし自身については、自分の弱さ以外には誇ることをすまい。もつとも、わたしが誇ろうと
 すれば、ほんとうの事を言うのだから、愚か者にはならないだろう。しかし、それはさし控えよう。わ
 たしがすぐれた啓示を受けているので、わたしについて見たり聞いたりしている以上に、人に買いかぶ
 られるかも知れないから。そこで、高慢にならないように、わたしの肉体に一つのとげが与えられた。
 それは、高慢にならないように、わたしを打つサタンの使なのである。このことについて、わたしは彼
 を離れ去らせて下さるようと、三度も主に祈った。ところが、主が言われた、「わたしの恵みはあな

たに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる」。それだから、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。

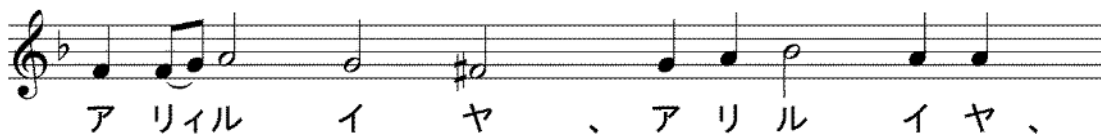
【 アリルイヤ 主日第2調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

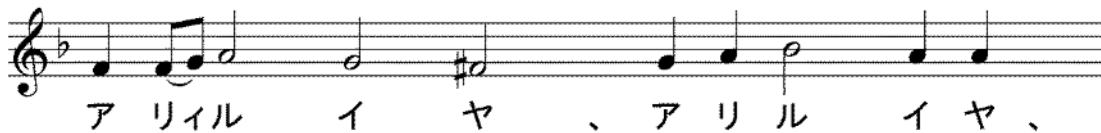
誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

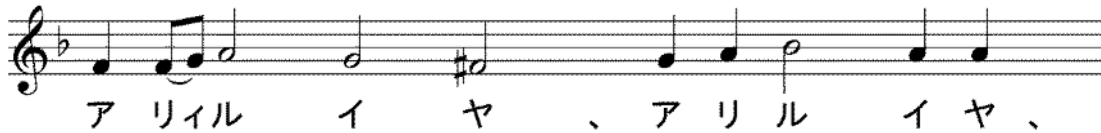
誦經) アリルイヤ、



誦經) ^{ねが しゅ うれい ひ おい なんぢ き} 願わくは主は 憂の日に於て 爾に聴き、^{かみ な なんぢ ふせ まも} イアコフの神の名は 爾を扨ぎ衛らん、



誦經) ^{しゅ おう すく またわれら なんぢ よ とき われら き たま} 主よ、王を救え、又我等が 爾に呼ばん時、我等に聴き給え、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ ところ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の 浄き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる 誠を

おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ
畏るる 畏 をも入れて、我等が 悉 くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ
を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋 ハリストス神よ、

なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ わげん ちち しせいしぜん
爾は我が 靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

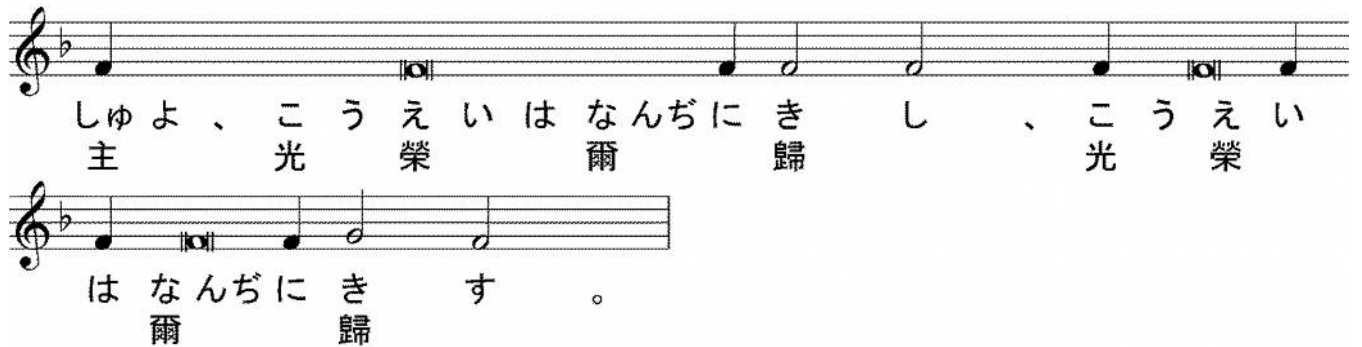
いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
て生命を 施す 爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世々に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 ルカ福音書26 端 6章31~36 節 】

司祭) えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん
睿智、 肅みて立て 聖福音經を聴くべし、 衆人に平安、



司祭) でん せいふくいんけい よみ
ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) つつし き しゅい ひと なんぢら おこな ほつ こと なんぢら か ごと
謹みて聴くべし、主曰えり、人の爾等に行わんを欲する事は、爾等も是くの如く

これ ひと おこな なんぢらも なんぢら あい もの あい なんぢら なん かんしゃ
之を人に行え。爾等若し爾等を愛する者を愛せば、爾等に何の感謝かあらん、

けだしぎいにんら かれら あい もの あい も なんぢら ぜん おこな もの ぜん おこな なんぢ
蓋 罪人等も彼等を愛する者を愛す。若し爾等に善を行う者に善を行わば、爾

ら なん かんしゃ けだしぎいにんら か ごと こと おこな も かせ のぞみ もの
等に何の感謝かあらん、蓋 罪人等も是くの如き事を行う。若し返さる望ある者に

か なんぢら なん かんしゃ けだしぎいにんら すう ごと かせ ため ぎいにんら か
借さば、爾等に何の感謝かあらん、蓋 罪人等も數の如く返されん爲に罪人等に借す

しか なんぢらてき あい なに のぞ ぜん おこな またか あた すなわちなんぢ
なり。然れども爾等敵を愛し、何を望まずして善を行い、又借し與えよ、則 爾

ら むくい おお なんぢらしじょうしゃ こ な けだしかれ おん そむ ものおよ あ もの
等の賞は多からん、爾等至上者の子と爲らん、蓋 彼は恩に負く者及び悪しき者に

じあい ほどこ ゆえ なんぢらじれん なんぢら ちち じれん ごと
慈愛を施す。故に爾等慈憐なること、爾等の父の慈憐なるが如くなれ。

(比較用 口語訳) 人々にしてほしいと、あなたがたの望むことを、人々にもそのとおりにせよ。自分を愛してくれる者を愛したからとて、どれほどの手柄になろうか。罪人でさえ、自分を愛してくれる者を愛している。自分によくしてくれる者によくしたとて、どれほどの手柄になろうか。罪人でさえ、そ

れくらいの事はしている。また返してもらおうつもりで貸したとて、どれほどの手柄になろうか。罪人でも、同じだけのものを返してもらおうとして、仲間に貸すのである。しかし、あなたがたは、敵を愛し、人によくしてやり、また何も当てにしないで貸してやれ。そうすれば受ける報いは大きく、あなたがたはいと高き者の子となるであろう。いと高き者は、恩を知らぬ者にも悪人にも、なさけ深いからである。あなたがたの父なる神が慈悲深いように、あなたがたも慈悲深い者となれ。

しゅよ、こうえいはなんちにきし、こうえい
 主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんちにきす。
 爾 歸